

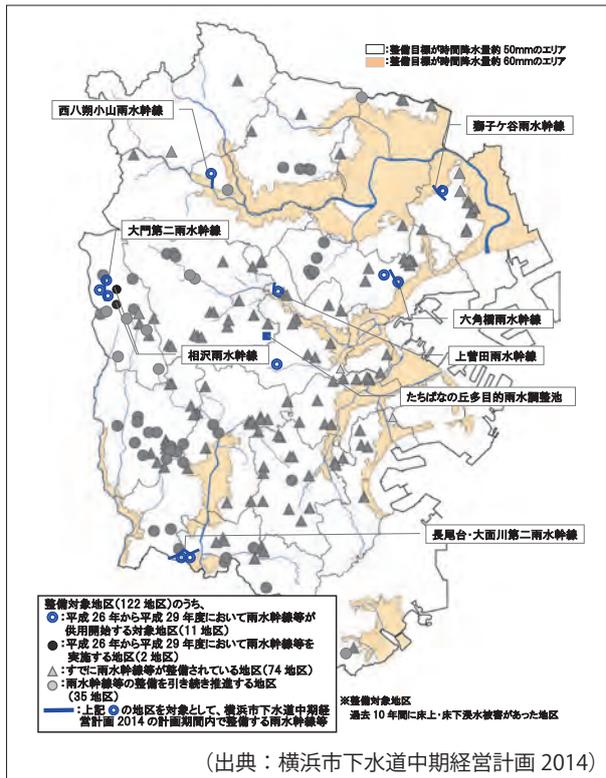
1. これまでの取組の成果を踏まえた課題

2006（平成18）年度の計画策定以降、「拠点となる緑、特徴ある緑をまもり・つくる」、「流域ごとの水・緑環境をつくり・高める」及び「水と緑の環境を市民とともにつくり・楽しむ」の3つの推進計画に基づき様々な取組を進めてきました。その取組の成果を踏まえ、今後に向けての課題を整理しました。

(1) 量的な確保が今後も必要

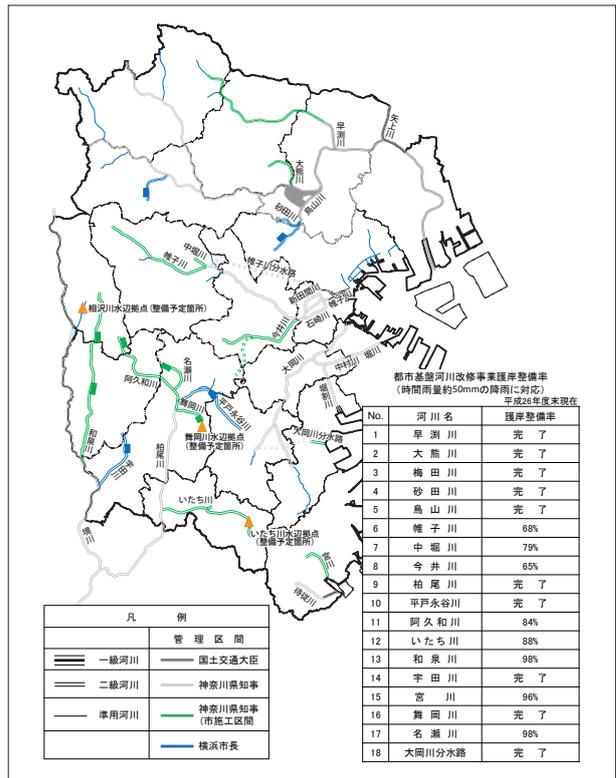
水環境では、下水道の雨水整備や河川の親水拠点の整備などの取組が進んでいますが、整備が必要な箇所はまだ残っています。緑については、「横浜みどりアップ計画」などによる、樹林地や農地の保全、緑化の推進のほか、公園の整備などの取組が着実に進みました。しかし、保全すべき樹林地は依然として多く残り、農地も減少が進んでおり、公園の充足目標もまだ達成されていません。また、農とのふれあいへのニーズや、公園や街路樹、緑化を通じた実感できる身近な緑への市民のニーズも高くなっています。

■時間降雨量約 50mm 対象地区での雨水幹線などの整備状況



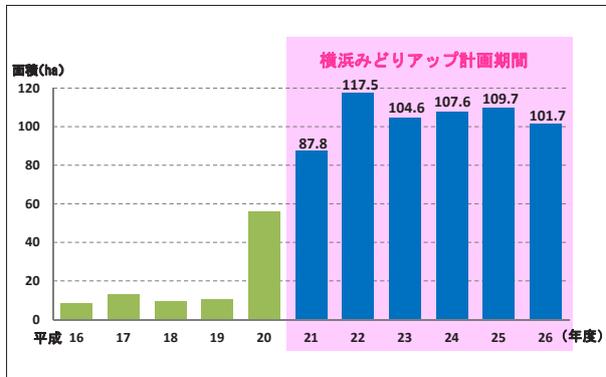
浸水被害を受けた地区は、2017（平成29）年度までに11か所を整備予定です。

■河川の整備状況



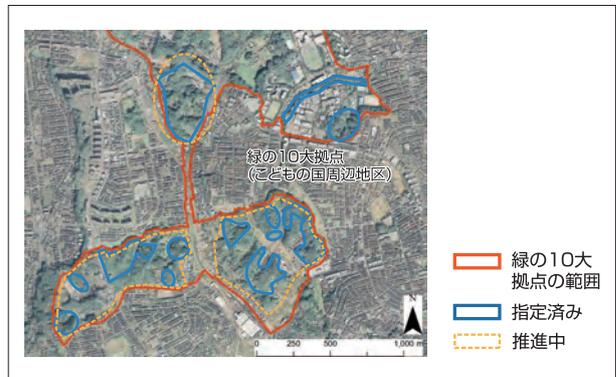
帷子川や今井川など一部河川で護岸の整備が完了していません。

■緑地保全制度による樹林地の新規指定の面積推移



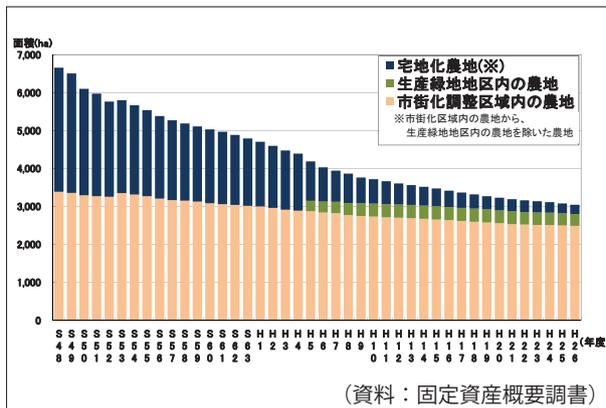
横浜みどりアップ計画の取組により樹林地の指定が大幅に進みました。

■保全すべき樹林地の一例



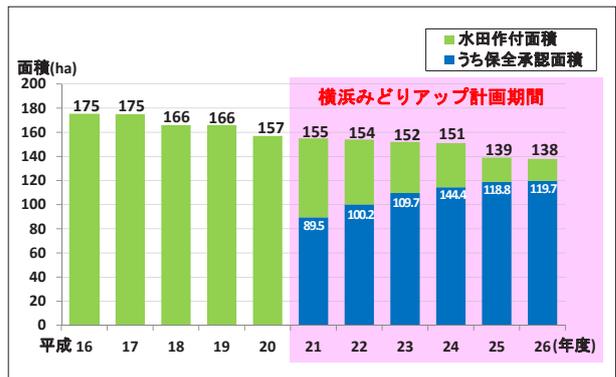
緑の10大拠点内にも保全すべき樹林地は多く残っています。

■農地面積の推移



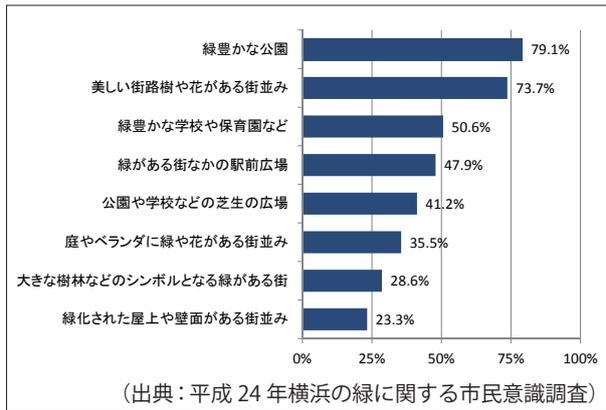
市内に残る農地面積は約3,000haとなっています。

■水稲作付面積、保全承認面積の推移



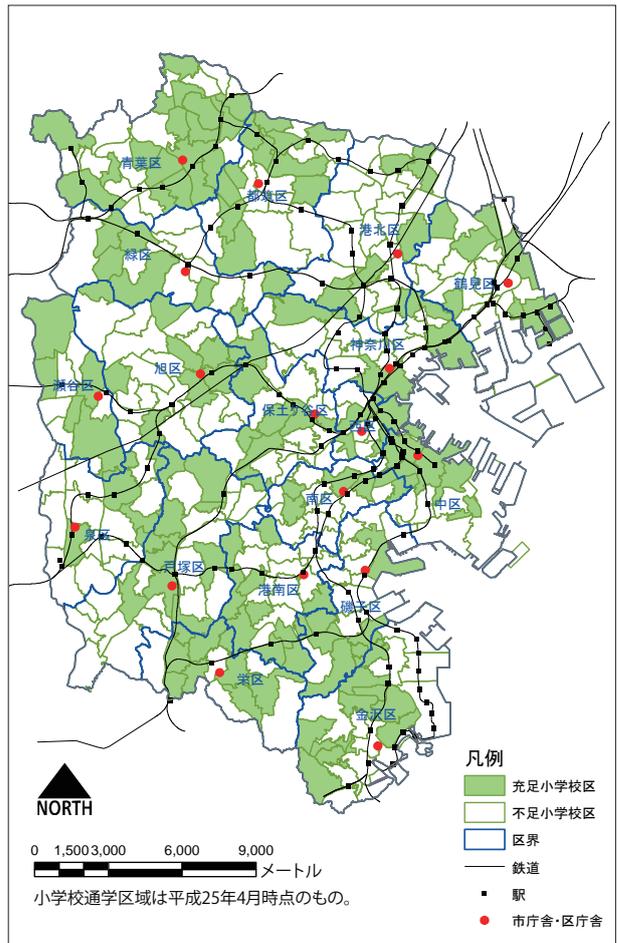
横浜みどりアップ計画の取組により市内の水田の約 8 割が保全されています。

■「街なか」にどのような緑があると良いか」への回答



緑豊かな公園や美しい街路樹、花がある街並みなど実感できる身近な緑へのニーズが高くなっています。

■身近な公園（街区公園・近隣公園）の整備状況



小学校区あたり街区公園2か所・近隣公園1か所を整備するという充足目標を一部で達成できていません。

■緑の創出の取組



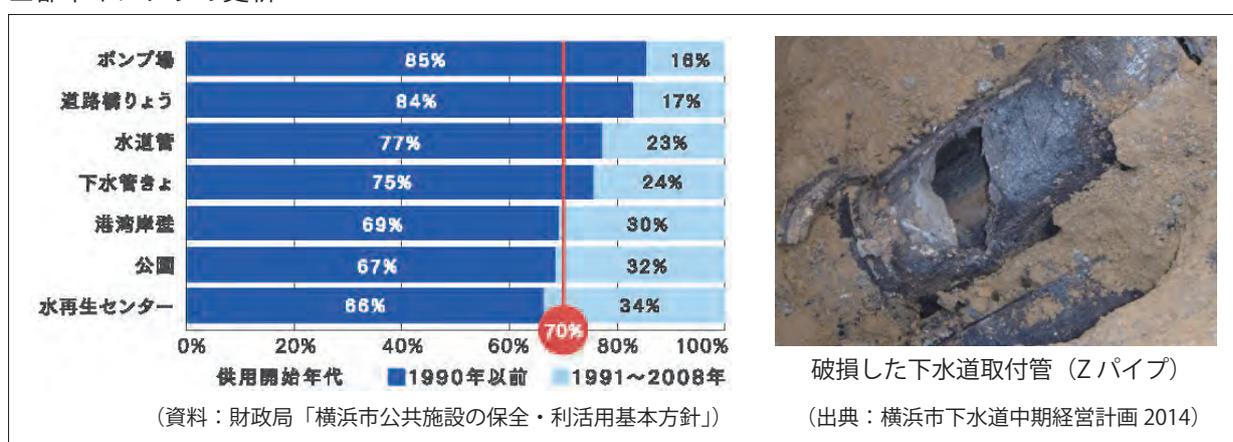
市民に身近な緑の創出は様々な場面で取り組まれており、より一層の充実が求められます。

(2) 適切なマネジメントが必要

●確保してきた水・緑環境の適切な維持管理

これまで都市の発展とともに、市域全体で河川、水路、下水道、街路樹、樹林地、農地、公園など多くの水・緑環境を保全・創出してきました。これらの確保してきた膨大な資産でもある水・緑環境は、老朽化が進み、施設の更新時期を迎えるものも多く、市民の安全性を確保しながら、将来にわたりその機能を発揮するためにも、適切に維持管理を行っていく必要があります。

■都市インフラの更新



都市インフラの多くは1990年以前に整備されており、2030（平成42）年には約7割が供用開始から40年以上を迎えます。

■河川施設の維持管理



1981（昭和56）年頃からの河川環境整備、1985（昭和60）年頃からの小川アメニティ・せせらぎ緑道整備によりこれまで多くの施設が整備されてきました。これらの多くが更新の時期を迎えており、適切な維持管理を実施することが必要になってきています。

■街路樹の維持管理



樹木の管理作業



倒木した街路樹

市内には約13万本もの街路樹、125万m²もの植栽帯があり、都市の景観を形成する重要な要素となっています。一方で年数の経った樹木については強風時の倒木などにより被害を及ぼすこともあり、樹木の状況を適切に把握しながら維持管理を行っていく必要があります。

■樹林地、農地、公園の維持管理



老朽化した農業用施設



安全対策が必要な斜面地

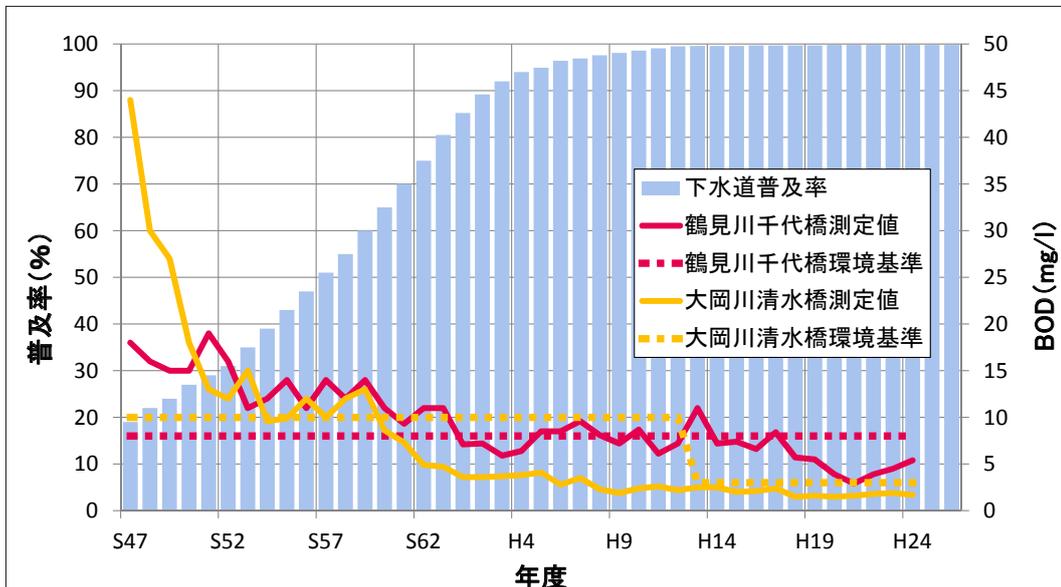
多くの施設が更新の時期を迎えています。また、保全した樹林地では外周部の安全対策が必要です。

●水・緑環境の質の向上

水環境では、高度処理施設の導入や事業者への排水規制、自然環境に配慮した河川改修などにより、生き物の生育・生息環境が回復するなど、河川や海域の水質や環境の改善が進みました。また、雨水浸透ますや雨水貯留タンクの設置など、健全な水循環に向けた取組も進んでいます。しかし、依然として水質改善が必要な河川・海域があり、海域については引き続き赤潮の発生がみられます。さらに、地下水の汚染防止や未規制化学物質への対応など新しい課題も出てきています。

緑については、公園の利用の促進に向けた取組や生物多様性に配慮した維持管理の実施など、質の向上に向けた取組も行われており、これらの取組を一層推進していく必要があります。

■下水道普及率及び河川水質（BOD）の推移



下水道整備の進展により河川水質は改善されました。

■生き物の生育・生息環境の回復



帷子川で確認されたアユ

河川における水質の改善や自然環境に配慮した改修により、市内の多くの河川で、アユが確認されるようになりました。

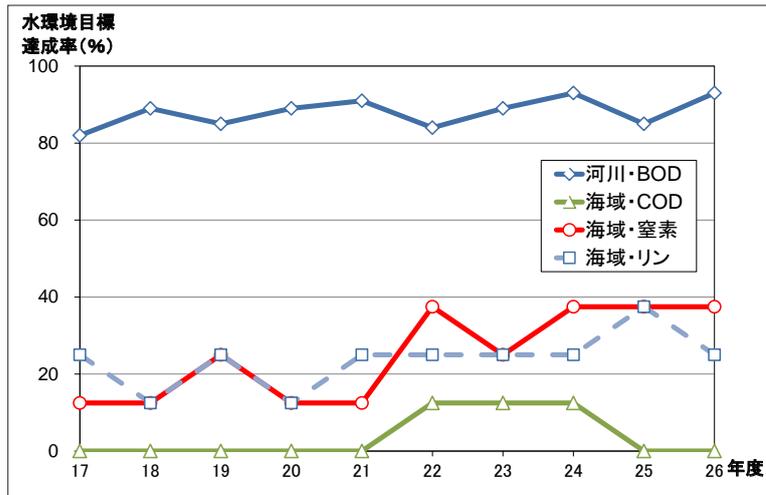
■健全な水循環に向けた取組



雨水貯留タンクの設置

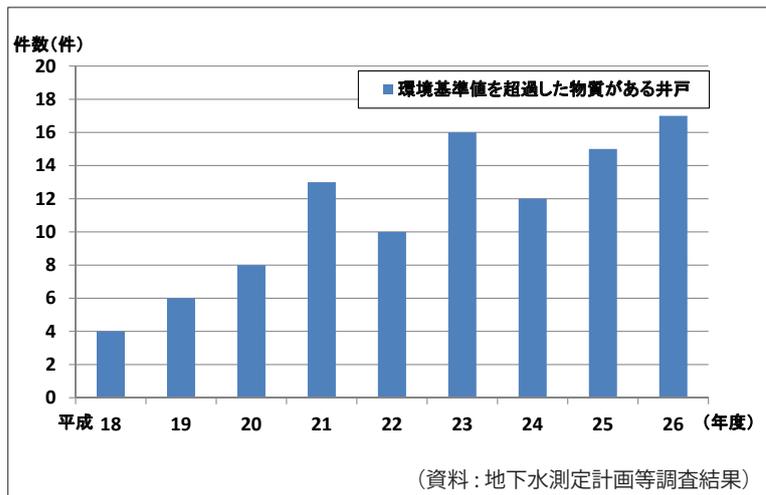
雨水貯留タンクの設置の助成を実施しています。

■河川・海域における水環境目標の達成率の推移



河川のBODは継続して高い達成率で推移していますが、海域の3項目(COD、窒素、リン)は、低い達成率となっています。

■地下水における環境基準を超過した井戸件数



一部の井戸で環境基準の超過がみられ、地下水の汚染が懸念されています。

■生物多様性に配慮した維持管理



小雀公園では、生物多様性に配慮した維持管理が行われています。

■公園の利用の促進に向けた取組



公園の利用促進の取組のひとつとして健康づくりのプログラムを実施しています。

(3) 市民との一層の関わりが必要

確保された水・緑環境の維持や利活用は様々な市民活動団体や事業者など多くの市民によって支えられています。

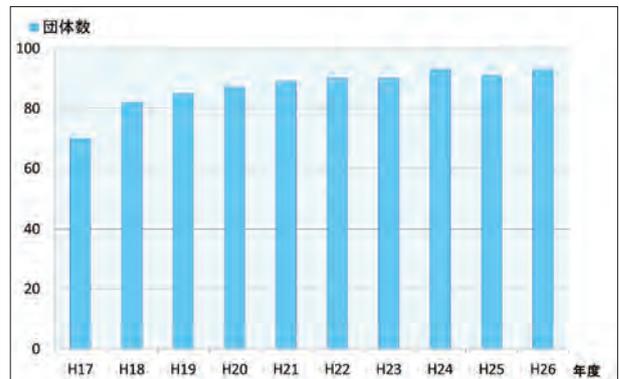
多くの水・緑環境を維持し、将来に引き継いでいくためには、このような活動は不可欠といえます。さらには、市民と水・緑環境の関わりが様々なかたちで深まることで、人々の暮らしがより豊かになることから、このような市民活動をさらに推進していくことが重要です。

■公園愛護会の団体数推移



公園愛護会は2014（平成26）年度末で2,432 団体が結成されています。今後は若い世代の活動への参加など、より多くの市民の関わりが必要となっています。

■水辺愛護会の団体数推移



水辺愛護会は2014（平成26）年度末で93 団体が結成されています。今後は、拠点を中心とした活動を、管理区域を超えた水系全体の活動へと展開していくことを意識した取組が必要です。



援農団体の活動



水辺愛護会の活動



活性汚泥の観察を補助するよこはま水環境ボランティア



事業者の CSR 活動による森林保全活動

2. 変化する社会状況と課題

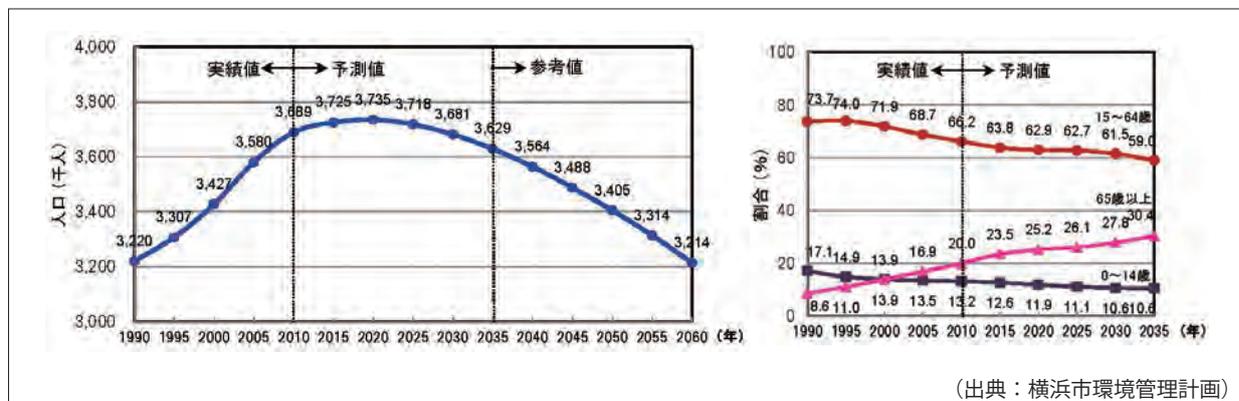
計画策定からおよそ10年が経過するなかで、水・緑環境を取り巻く社会状況は様々な変化が生じています。そこで、「人口減少の進行と少子高齢化社会の到来」「都市構造の変化」「自然災害の脅威」「地球温暖化の進行・ヒートアイランド現象の顕在化」「市民のライフスタイルの多様化」「水・緑環境に求められる役割の拡大」といった視点から社会状況の変化やそれに伴う課題について整理します。

(1) 人口減少の進行と少子高齢化社会の到来

●地域コミュニティの維持

本市では2019（平成31）年以降に人口減少を迎えると予測されており、一部の区ではすでに人口減少がみられます。今後、高齢化が更に進むことで、市民生活を支える地域活動の担い手の不足や住民同士の交流が疎遠になることなどにより、地域コミュニティを維持していくことが困難になると予想されます。

■横浜市における人口予測（左図：人口の超長期予測（中位・中位推計）、右図：年齢構成の長期予測）



●都市施設の再編

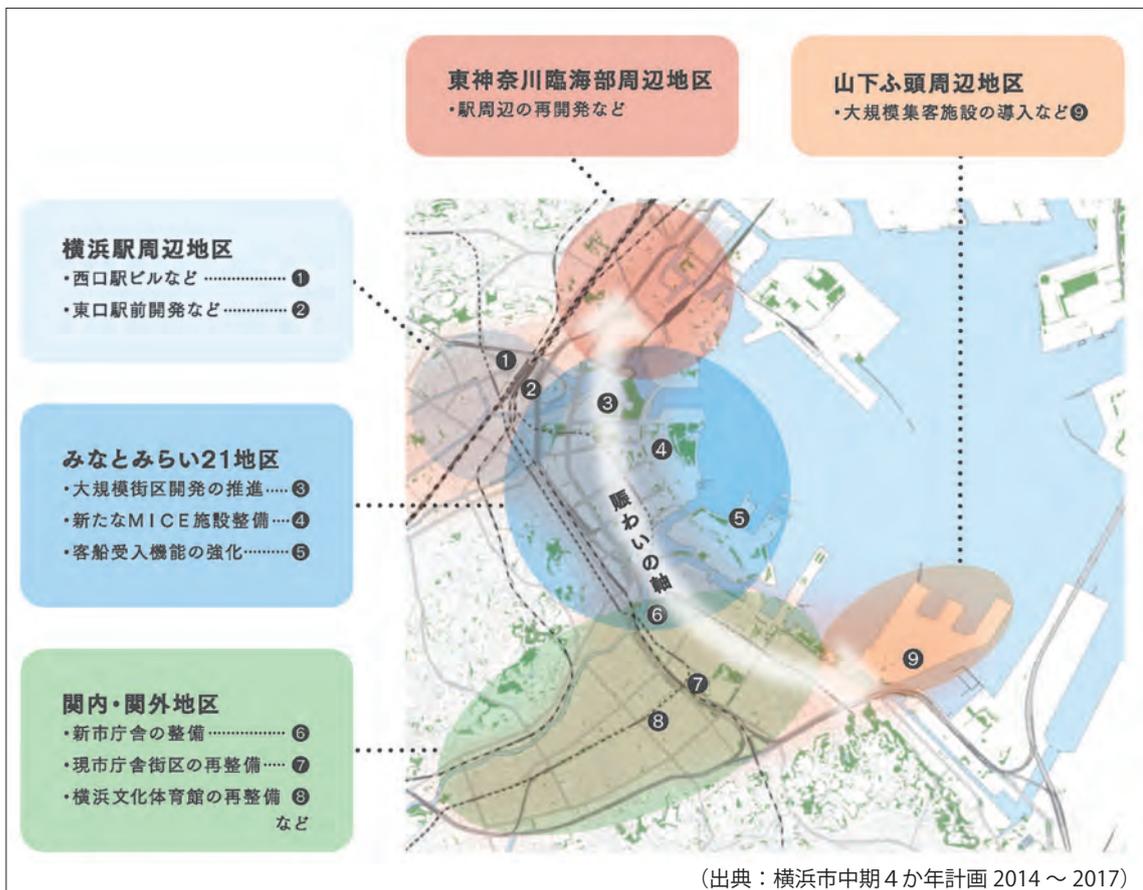
人口動態の変化に対応し、魅力と活力ある都市の再生を図るために、駅やインターチェンジなどを中心に、コンパクトな市街地形成や都市機能の強化を進めていくことが求められています。

●高まる都市間競争

都市間の競争の激化や広域的な交通ネットワークが変化するなかで、横浜市が人や事業者から選ばれるよう、国際都市横浜の顔である都心臨海部の強化が求められています。

郊外部においても、身近な場所で水や緑を実感できる、誰もが住みたい、住み続けたいと思える、暮らしやすい魅力あふれるまちづくりを推進していくことが求められています。

■都心臨海部の再生・機能強化



●健康への関心の高まり

2025（平成 37）年には、団塊の世代が 75 歳を超え、市内の高齢者が約 100 万人と大幅に増加すると予測され、今後、社会保障費の増加や福祉・医療サービスなどの需要の増大が見込まれます。一方、市民の健康への関心の高まりもあり、市民が様々な健康づくりやスポーツを通して健康的な生活を送るといったニーズは高まってきています。

■横浜市における健康寿命と平均寿命

	健康寿命（平成 22 年）		平均寿命（平成 22 年）	
	男性	女性	男性	女性
全国	70.42 年	73.62 年	79.55 年	86.30 年
神奈川県	70.90 年	74.36 年	80.36 年	86.74 年
横浜市	70.93 年	74.14 年	80.29 年	86.79 年

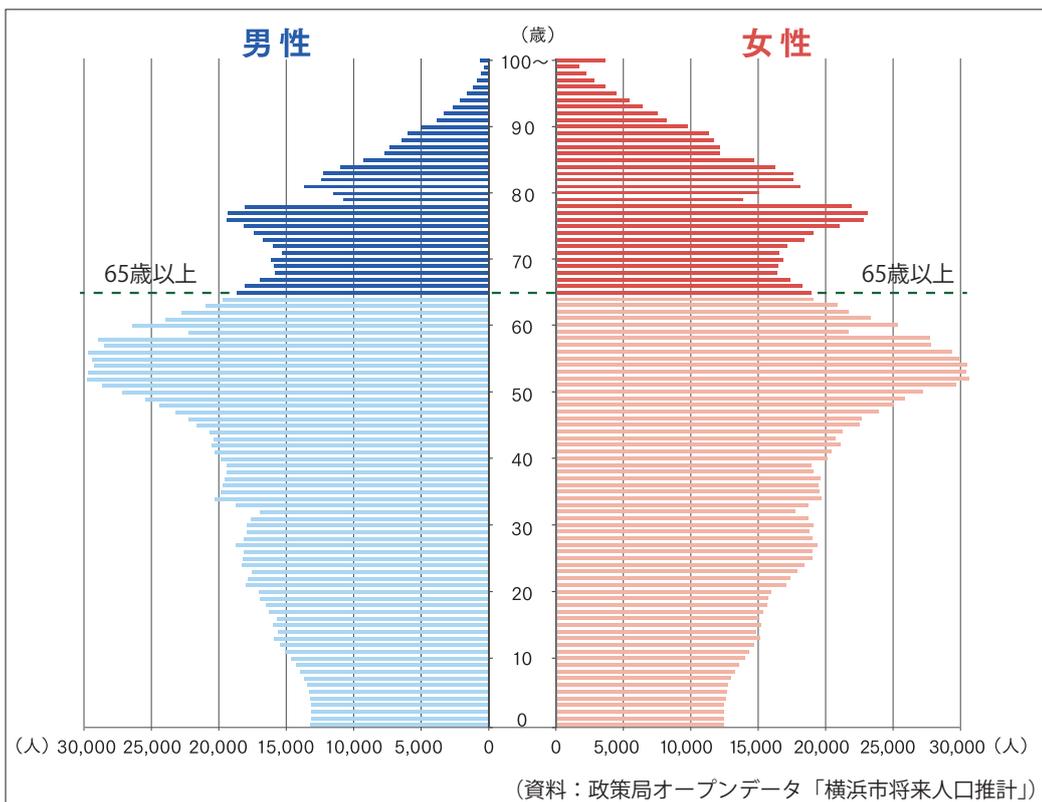
（資料：厚生労働省）

※健康寿命とは、「健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間」をいいます。

●シニアパワーの発揮

団塊の世代を中心に、居住地から離れたところで仕事中心に生活を送っていた人々の多くが地域に活動の場を移しつつあり、シニア層がこれまでに培った能力や経験をいかし、社会で活躍する場づくりが求められています。

■ 2025（平成 37）年の男女別人口（推計）

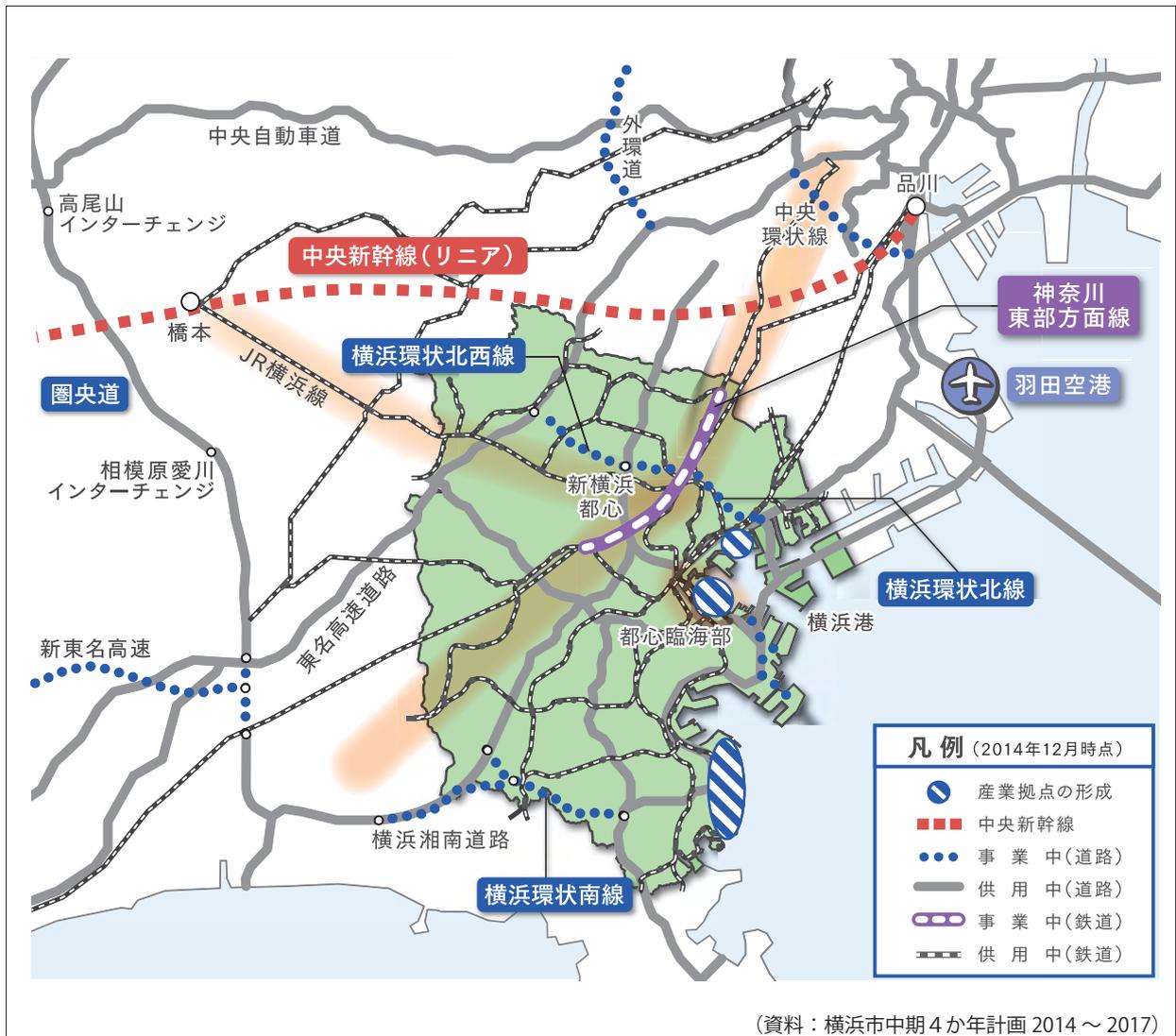


(2) 都市構造の変化

●広域的な交通ネットワークの変化

広域的には、首都圏中央連絡自動車道の開通により、東名高速道路や中央自動車道などを結ぶネットワークが形成されたことに加え、羽田空港の更なる国際化や2027（平成39）年の中央新幹線（リニア）の開業が予定されています。市内でも、神奈川東部方面線の開業、横浜環状道路（北線、南線、北西線）、横浜湘南道路の開通が予定されています。こうした交通ネットワークの変化により、横浜を取り巻く人や物の流れが大きく変化していくことが見込まれます。

■広域的な交通ネットワークの変化



●市内米軍施設の返還と跡地利用の推進

戦後接收され米軍の施設となっていた場所の一部が返還され、その跡地の利用について、地域の活性化や広域的な課題解決に資するよう検討が始まっています。

■市内の米軍施設位置図



旧深谷通信所（約 77ha）



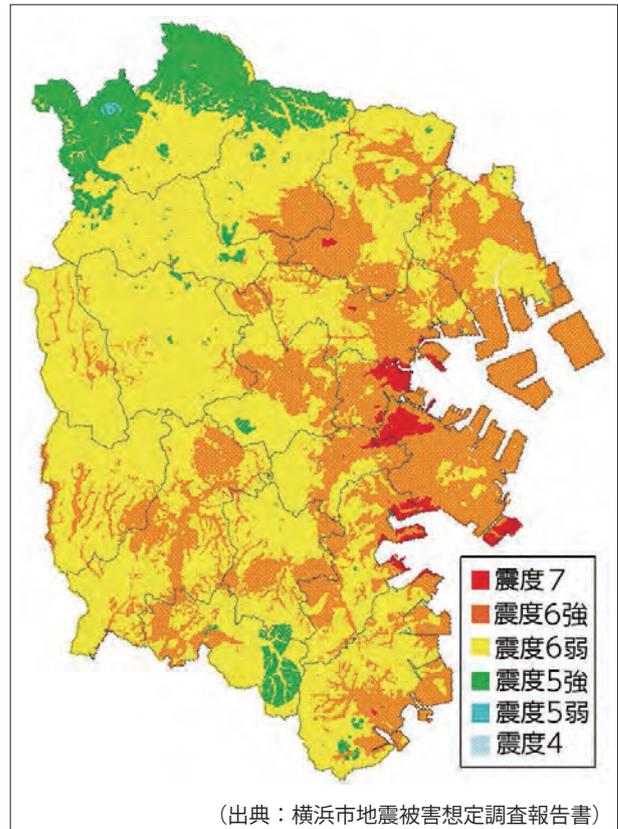
旧小柴貯油施設（約 53ha）

(3) 自然災害の脅威

●想定される大規模地震

横浜に大きな被害をもたらすと考えられる地震が、今後30年のうちに70%程度の確率で発生すると考えられており、災害時の避難場所の確保や下水道施設の耐震化など都市インフラの強化が求められています。

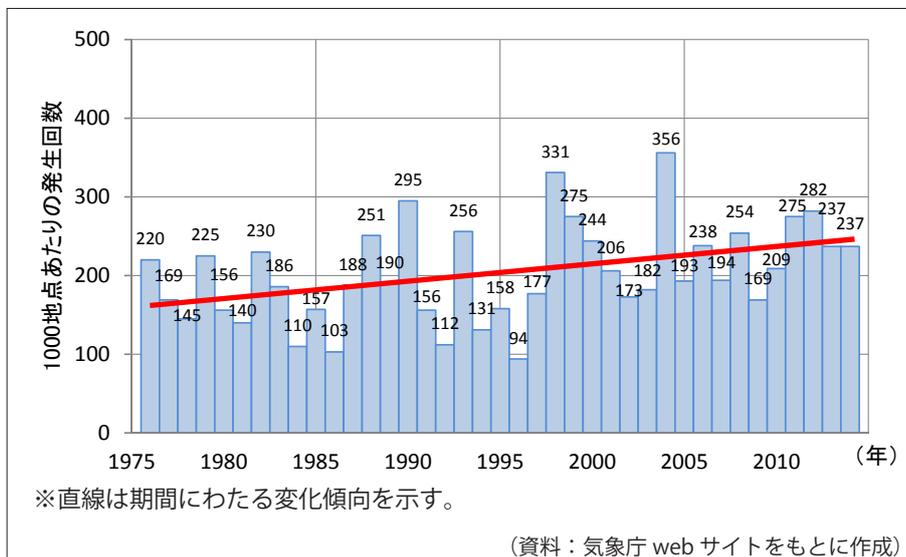
■元禄型関東地震において想定される震度分布



●近年増加する局所的大雨

近年、下水道の整備水準を超える局所的大雨の発生により、市民生活や都市機能を脅かすリスクが高まっています。

■(アメダス) 短時間強雨発生回数の長期変化 (1時間降水量 50mm以上)

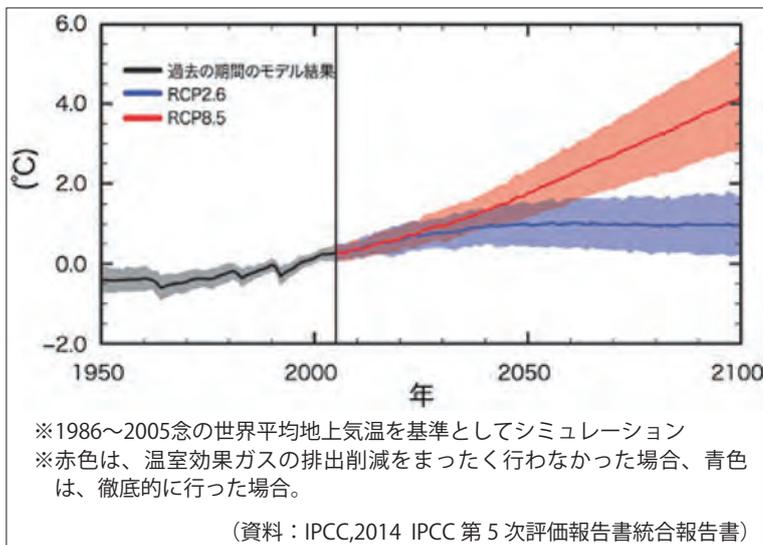


(4) 地球温暖化の進行・ヒートアイランド現象の顕在化

●地球温暖化の進行

気候変動に関する政府間パネル（IPCC）は、2014（平成26）年に発表した報告書で「地上気温は、評価された全ての排出シナリオにおいて21世紀にわたって上昇すると予測される」としています。今後、地球温暖化の進行に伴う影響として、大雨、洪水、渇水などのリスクの増大が懸念されています。

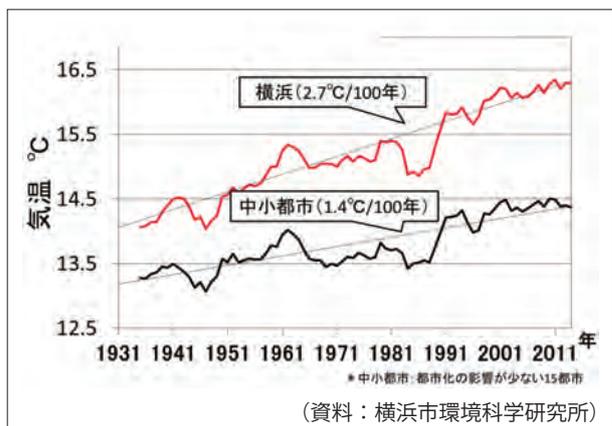
■2100年までの世界平均地上気温の変化予測モデル



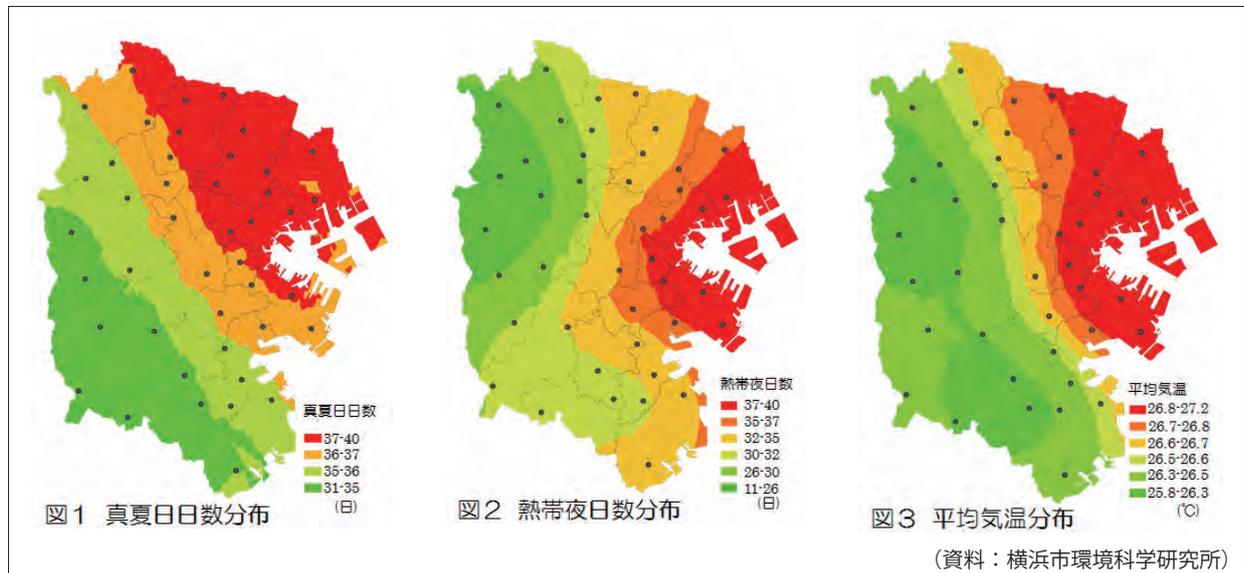
●ヒートアイランド現象の顕在化

都市化に伴う地表面の人工化、建物の高密度化などによって、ヒートアイランド現象が起こっています。夏季の気温観測の結果によると、日中は市内の北東部（鶴見区、港北区、都筑区など）、夜間は横浜港周辺（神奈川区、西区など）で気温が高くなる傾向があり、極端に暑い日の増加によって、熱中症など健康への影響も懸念されています。

■横浜と中小都市の平均気温の推移



■2015（平成27）年度の気温観測結果（7～8月、62日間（1,488時間））



(5) 市民のライフスタイルの多様化

●ライフスタイルの多様化

経済成長やそれに支えられた大量消費社会から成熟社会を迎えた現代において、市民の価値観やライフスタイルは多様化しており、市民の水・緑環境に求める関わり方やニーズも多様化しています。



水辺でのレクリエーション



身近な農地で採れたてを味わう



森でボランティア活動に参加する



公園で休日を過ごす

●全国都市緑化よこはまフェアの開催

2017（平成 29）年に全国都市緑化よこはまフェアが開催されることを契機に、市民の緑に対する関心も一層高まっていくことが予想され、市民と緑との関わりをより深め、緑豊かな美しいまちづくりを進める絶好の機会となります。



都市緑化あいちフェアの様子



都市緑化フェア TOKYO の様子

(6) 水・緑環境が果たす役割の拡大

良好な水・緑環境を創出することで、新たな賑わいが生まれ、魅力を高めている事例が国内外で増えています。また、子育て支援や健康増進など、水・緑環境が都市のなかで果たす役割は拡大しています。



廃線跡地を活用した東横フラワー緑道



山下公園内のレストハウスの活用



日本大通りのオープンカフェ



大岡川におけるレジャー用棧橋（日ノ出棧橋）



廃線跡地を活用した海外の事例
（ニューヨーク、ハイライン）



「みなと」の魅力を高めるビジターバス

3. 今後の方向性

計画の改定にあたっては、生物多様性の保全など水・緑環境の持つ役割を踏まえつつ、これまでの取組の成果を継承・発展させながら、社会の変化にも柔軟に対応した計画内容としていく必要があります。

そこで、本計画の見直しでは、「横浜の魅力を高める水・緑環境の保全・創出・育成」と「水・緑とともにある多様なライフスタイルの実現」の2つの視点から、今後の水・緑環境の方向性を示します。

(1) 横浜の魅力を高める水・緑環境の保全・創出・育成

① 継続した保全・創出と未来に引き継ぐストックマネジメント

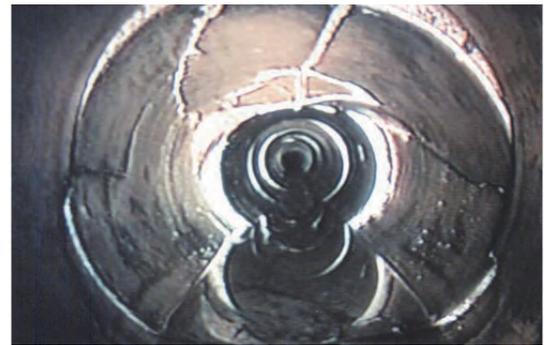
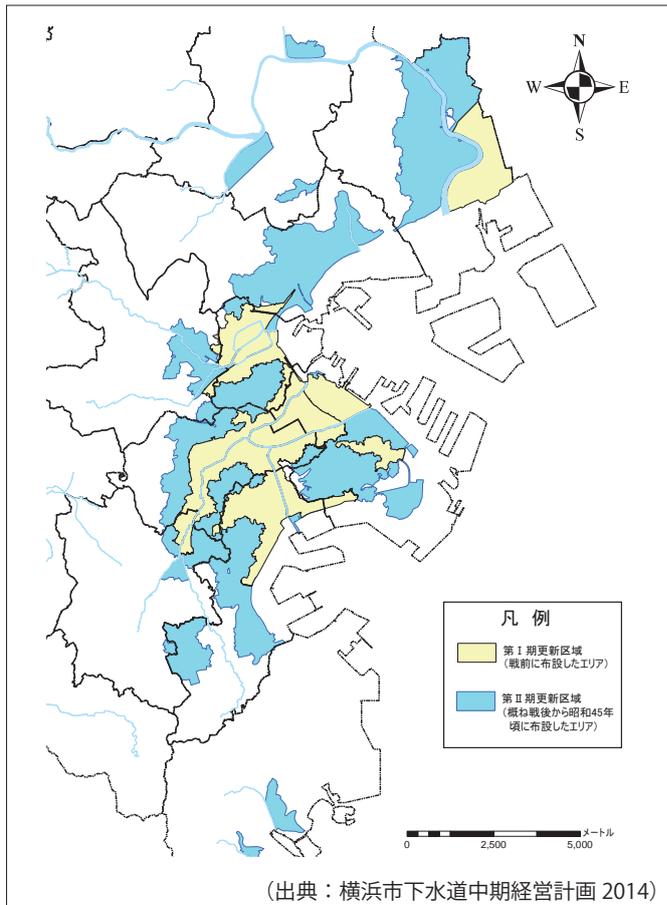
これまでの水・緑施策の取組により、河川、海域、水路、下水道、公園、樹林地、農地、街路樹など多様な水・緑環境が保全・創出されてきました。今後も水・緑環境の保全・創出に向けた取組を継続していきます。

担保された水・緑環境の機能を維持し、さらに向上させるために、効果的・効率的な管理・運営、計画的な更新を行っていきます。また、樹林地の外周部をはじめとした安全性の向上や良好な景観の保全形成、生物多様性の保全、利活用の促進、水環境の維持・向上など、質を向上し、都市インフラとしての価値を高める水・緑環境のマネジメントを一層進めていきます。

これらの取組を進めるにあたっては、市民、NPO、事業者などとも連携を図りながらその価値を高めて、次世代に引き継いでいきます。

さらに、子育て支援や健康増進など社会からの要請に応えた、水・緑環境の創出や活用を図っていきます。

■計画的な再整備が求められている下水道管路の再整備事業区域図



下水道管内の状態を点検・調査

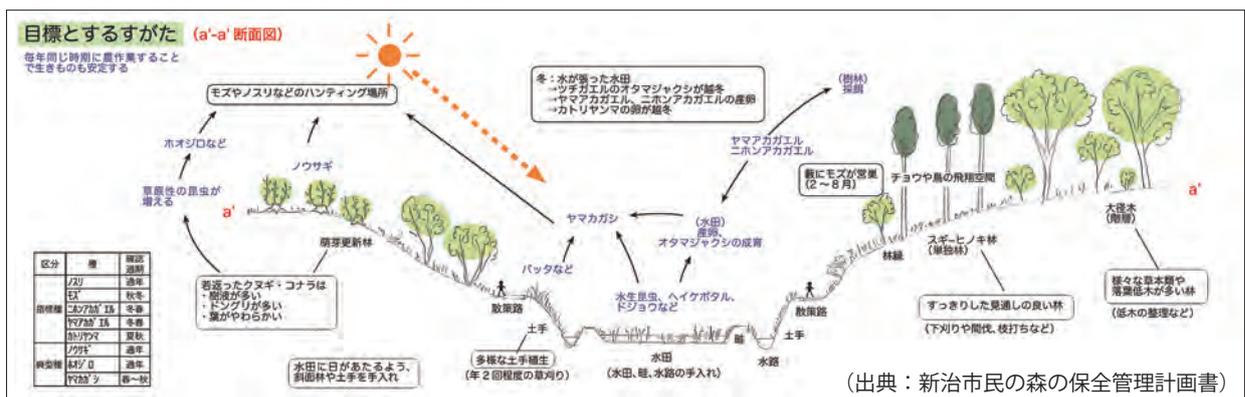


吸引車による下水道管の清掃

■適切な施設の維持管理の取組



■保安全管理計画による計画的な管理の実施



市民の森などではその森の将来像や管理方法を定める「保安全管理計画」を策定し、市民と協働で生物多様性や安全性に配慮した計画的な維持管理が実施され始めています。

■水・緑環境の価値を高める様々な取組



エリアマネジメント団体による
オープンカフェ（グランモール公園）



下水処理施設の上部空間を活用した
太陽光発電（神奈川水再生センター）

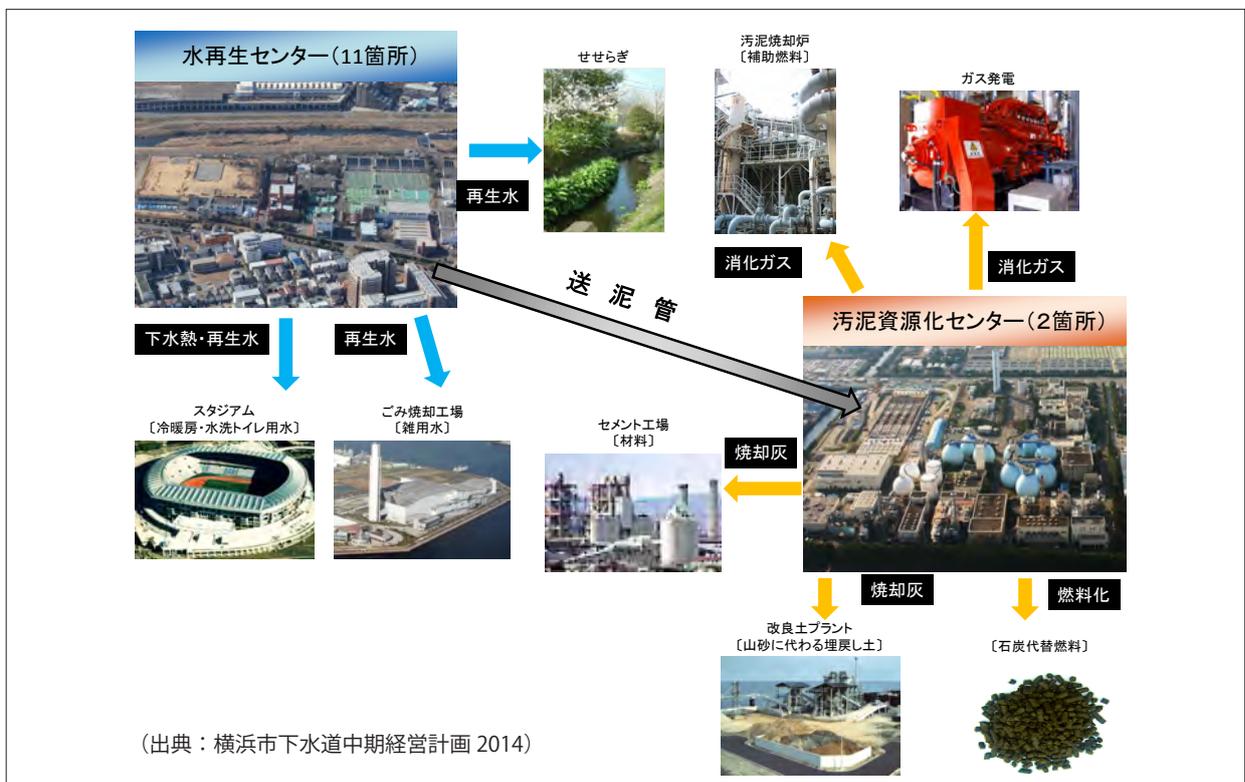


様々な遊びを可能にしたプレイパーク
（能見台中央公園）



樹林地外周部の管理
（境木ふれあいの樹林）

■下水道の資源・エネルギー有効利用の流れ



下水処理過程で得られる処理水と汚泥を資源ととらえ、多様な手法で有効利用しています。処理水は再生水として、水洗トイレ用水や冷暖房の熱源として活用し、汚泥は汚泥資源化センターで集約処理を行い、処理過程で発生する消化ガスを用いて発電を行っています。そのほか、燃料化事業にも着手するなど、有効利用の多様化を図っています。

③ 防災・減災に資する水・緑環境

今後予想される地震災害に備え、下水道施設や河川施設などの都市インフラの強化、災害拠点の整備、河川水の活用、災害時の避難や延焼の拡大を防ぐための公園などのオープンスペースを確保していきます。

また、近年増加している局所的大雨に対応できるよう、雨水幹線の整備を進めるほか、浸水ハザードマップや水防災情報システムを活用した情報提供などの自助・共助の取組も推進していきます。

地球温暖化の進行に対しては、水・緑環境の保全によるCO₂の吸収といった緩和策だけでなく、適応策として、都市の防災機能を有する緑の保全や河川・下水道などの都市インフラの整備などの治水対策を推進します。

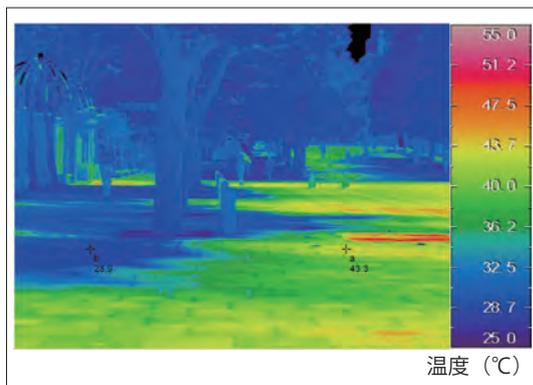


局所的大雨に対応する雨水幹線の整備



貯留・涵養機能を持つ樹林地

■市街地に涼をもたらす緑

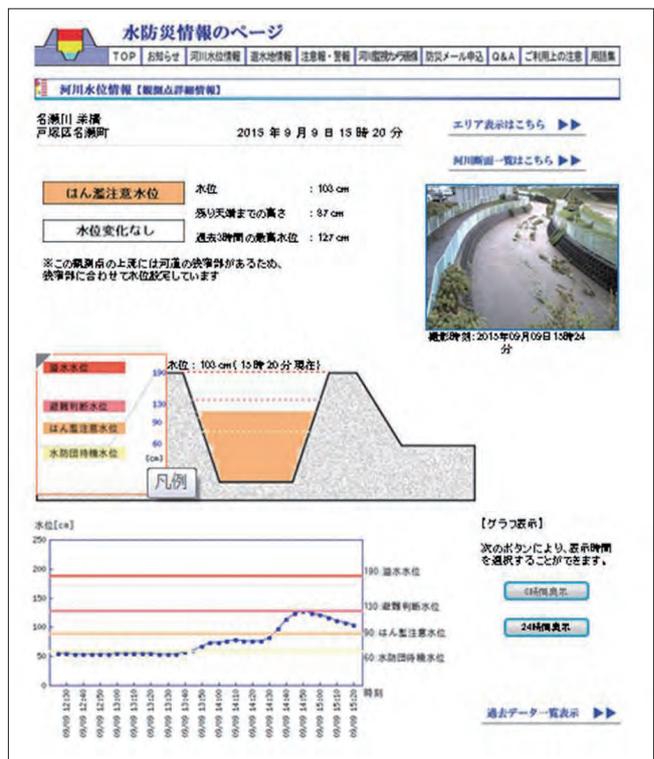


青から赤になるにつれ高い温度を示しています。樹木のある場所は、青く表示され、温度が低いことがわかります。

また、樹木や水面などは水分の蒸発により、空気を冷やす機能があり、ヒートアイランド現象を緩和することが期待されます。積極的に市街地に水や緑を増やし、ネットワーク化することで、風の道となる連続的な水・緑環境の形成を図ります。

街路樹については、風格ある都市の景観をつくるだけでなく、延焼防止などの防災・減災機能を有しています。こうした機能を発揮できるよう、老朽化した樹木の更新なども含めて、適切に維持を行っていきます。

■水防災情報システム（ホームページによる情報提供）



④ 横浜の魅力を高める都心臨海部での創出・育成

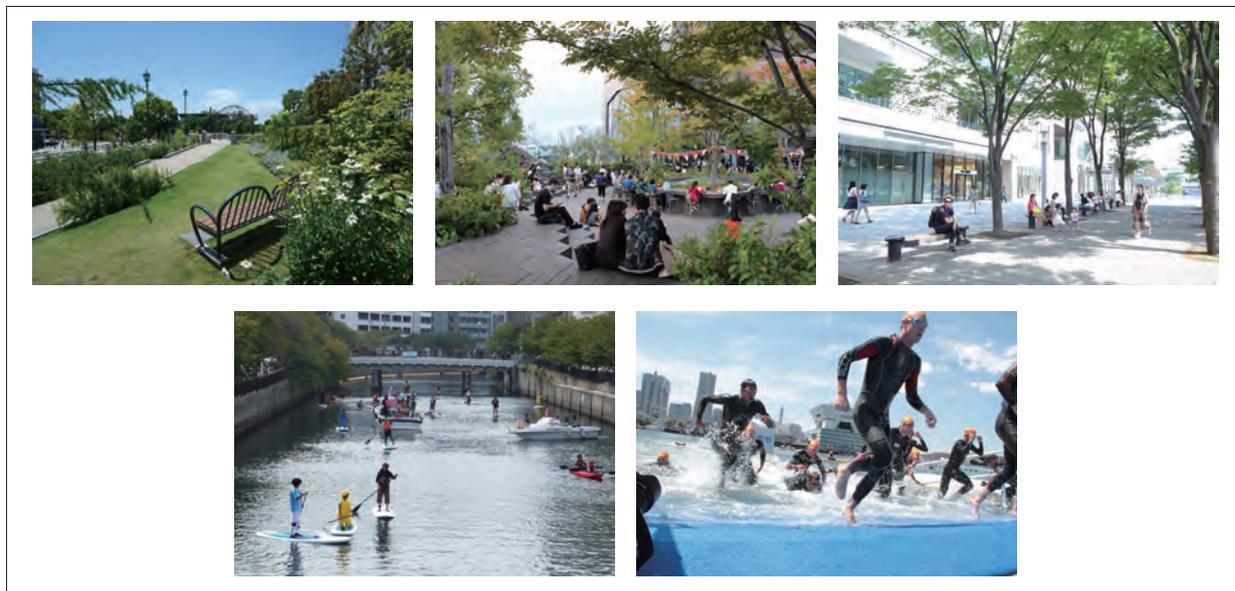
横浜の成長エンジンとなる都心臨海部では、快適で魅力的なまちづくりや観光・MICE 振興、先進的な文化芸術創造都市の取組などにより、世界中の人々を惹きつけ、都市の活力と賑わいを創出するまちづくりを推進しています。

水・緑環境は、都市の魅力を印象づける重要な要素です。緑の創出、街路樹の育成、海の水質改善の取組などを通じた水と緑のネットワークを形成するとともに、魅力的な水・緑環境の創出により新たな賑わいが生まれることで、都心臨海部全体の魅力を高めていく取組を推進します。

■都市環境づくりに向けた取組



■水・緑環境による賑わいの創出



(2) 水・緑とともにある多様なライフスタイルの実現

① 多様な世代が輝ける場づくり

水・緑とともにある豊かなライフスタイルの実現に向けては、子供からお年寄りまで多様な世代がそれぞれの暮らしのなかで、水や緑に親しみ、関わるができるような取組が求められます。

水・緑環境に関するイベントや情報発信などを通したきっかけづくりをはじめ、身近な緑を増やす取組の充実や子供の自然体験の場づくり、シニア層が豊富な経験や能力を発揮できる場づくり、健康づくりや文化活動の充実など、市民が水・緑環境とふれあい、学び、関わり、活躍することができる取組の充実や場づくりを進めていきます。



緑の担い手を育成する講座



子育て環境の場となる水辺環境



環境教育の場となるウェルカムセンター



健康づくりの場ともなる市民の森

② 市民の力で育むより良い水・緑環境

それぞれの地域で生活する市民は、日々の暮らしの中で水・緑環境に日常的に接しています。この市民一人ひとりが水・緑環境に主体的に関わることで、様々な可能性が広がります。

これまでも、公園や河川、水路、樹林地など様々な場所において、市民活動により、良好な水・緑環境が育まれてきました。より良い水・緑環境が求められ、さらに保全・創出された水・緑環境のストックが増えていく中で、市民活動の役割はより重要となっています。

市民活動が継続して活発に行えるよう、より多くの市民が活動に参加できるような仕組みづくりや、活動団体同士の連携を図る取組を進めていきます。

ほかにも、市民が毎日の生活の中で把握した水・緑環境の状況を、情報ツールも活用しながらデータとして蓄積すると、様々な施策に活用していくことが可能です。こうした取組は、より良い水・緑環境につながるだけでなく、そこに関わる市民にとっても、楽しみや生きがいにつながっていきます。



子供たちによる河川の清掃活動



「京浜の森づくり」でのトンボ調査



地域住民による緑化活動

③ コミュニティの形成

公園や水辺などのオープンスペースは、子供の遊びや散策、まつり、バザー、防災訓練などの地域での様々な活動の場として利用され、地域内での交流の場ともなっています。また、愛護会活動により地域で支えられる公園や水辺は美しく維持されています。このような水・緑環境の利用や保全活動を通して、住民同士の交流が盛んになることや、地域を見る目、気にする目が多くなることにより、地域の防犯や安全などの課題の解決につながる効果も期待できます。

また、市民が利用する農地についても、農作業を通じた利用者同士のコミュニケーションの場として機能しています。

今後も継続して水・緑環境を通じたコミュニティの活性化や醸成を図ります。



農作業を通じたコミュニケーション



公園での活動が育む地域のつながり



公園を活用した地域での見守り活動
(阿久和向原第二公園)



親水拠点でのフェスタ開催

④ 市民との関わりの深化

2017(平成29)年に開催される全国都市緑化よこはまフェアでは、これまで市民とともに培ってきた水・緑環境を広くアピールするとともに、フェアを契機とした市民意識の高まりをとらえ、より市民が水・緑環境との関わりを深めるよう施策を展開していきます。



全国都市緑化よこはまフェアイメージ図 (みなとガーデン)



全国都市緑化よこはまフェアイメージ図 (里山ガーデン)

